

夏期講習だより

第2号

文責 研修委員 毛利 裕美 (箕輪中学校)

5月28日(木) 第1回 夏期講習事前読み合わせ会報告

第1回読み合わせ 令和8年5月28日(木)

読み合わせ範囲 「西田哲学選集」第一巻 「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部「善の研究」
「第一編 純粹経験」(第一章 純粹経験)

司会者: 大口 琢弥 先生(辰野中学校) レポーター: 大月 美怜 先生(伊那小学校)

【大月 美怜先生レポートから】

1. はじめに

哲学委員2年目。昨年、文章を初めて読んだとき、なぜ唐突に純粹経験について考えるのか、それを考えるのにどんな意味があるのか、分からなさが湧いてきた。唐澤先生から、筆者の考えは「序」に書かれていること『善の研究』の「序」には「第一編は、余の思想の根底である純粹経験の性質を明らかにしたものである」「第二編は、余の哲学思想を述べたもので、この書の骨子というべきものである」と書かれていると教えていただいた。そこから「西田先生の思想は、この後に出てくるのだ」とお聞きし、ほっとしたのを覚えている。哲学書を自分ひとりで読み進めることは難しい。一緒に読み合わせる先生方や講師の先生方の力をお借りして、純粹経験や善について新たな気づきがあるといいなと思いながら、2年目は楽しみながら参加したいと考えている。今回、自分の実体験からレポートをまとめた。

2. 純粹経験とは

80頁1行目「**経験**するとは、事実そのままに知る意である。全くの自己の細工を棄てて事実に従うて知るのである。**純粹**というのは(省略)毫も思慮分別を加えない、真に経験そのままの状態」とある。

1年生の担任をしたとき、子どもが何を見、感じているのを知りたくて子どもの近くの木の根に座ったことがある。野に出て風に揺れる木の葉は波の音、林を抜ける風の心地よさを潮風として「航海ごっこ」をしていた。何かが見え、聞こえてくるその前の瞬間が純粹経験ではないかと考える。

子どもの遊びのなかに「いいもの見つけた」「いいこと思いついた」と自分の内から何かが生まれる瞬間が幾度も起こる。遊びのなかに純粹経験がたくさん詰まっているのかもしれない。純粹経験がなければ遊ぶことはできないのかもしれない。「航海ごっこ」をしたAさんは学校ではぎこちないが、野に出るといきいきとしている。これは純粹経験が関係しているのかもしれない。「自己の細工を棄てて」とは、こうでなければならないという枠がなくなっていくことなのかもしれない。自分を取り巻く環境に身を委ねられるという余白が純粹経験につながり、「いいもの見つけた」「いいこと思いついた」と自分の内に何かが生まれる瞬間へとつながっていくのだろう。

3. 主客未分に転じて行くとは

82頁10行目「我々は少しの思想も交えず、主客未分の状態に注意を転じて行くことができる」と書かれている。例として、一生懸命に断崖を攀ずるときと、音楽家が熟練した曲を奏するときが挙げられている。純粹経験は、主客が分かれる前の瞬間のことだけでなく、主客が分かれた後に再び合わさるときも純粹経験なのだと理解した。

ダンゴムシを発見した子どもたちの体験から。Bさんはダンゴムシを手の中で「開くまでまってみよう」と片手を添えてじっと見つめる。やがて丸まったダンゴムシから白い足が出て歩き出す。ダンゴムシの進路に合わせてゆっくり手のひらを返しながらその動きをじっと見つめた。友だちに「ぼくのダンゴムシ、ぼくに慣れたから、全然手から落ちない」と笑顔を見せた。ダンゴムシが開くまで待っていたBさんは、ダンゴムシを外から観察しているので主と客が分かれている状態。ダンゴムシを見つめ片手を添えたり、進路に合わせてゆっくり手のひらを返したりするなかでダンゴムシを外から観察するのではなく、自分がだんだんダンゴムシになっていったのではないのか。このダンゴムシになっていく経路が主客未分に転じて行くのではないのか。主客が合一する純粹経験のときに、よりよく生きるということを学んでるのかもしれない。

4. おわりに

純粹経験は、特別なものではなく、どの人も毎日のように経験しているもの。教師も自分の細工を棄てる必要があると思う。先入観や大人の都合を横に置き、身を委ねるなかでその子どもと共に感じたい。

【グループ討議まとめ】

A グループ

主客未分について考えた。レポートからBさんの具体的な話を聞いて、Bさんがダンゴムシになったのでは？意識をせずに無意識になったのではないかと。また、泣いている人を客観的に見た人が泣く（その心情になって）というのも主客未分なのではないか。泣いている子を見ていっしょに泣き出すとは違うのではないか。

B グループ

純粹経験の瞬間がいつなのかを考えた。わからない。色をみて水色と感じる。純粹とは？知識を得てしまったのならどんなことが純粹経験になるのか。

C グループ

ダンゴムシの話を聞き、純粹経験とは主客が分かれることについて考えた。学校では主体的な学びに取り組んでいる。子どもがこちらの話を聞き流すことがある。でも、違うと思う瞬間は客観ではない（主体的に考えている）と思う。はっとする瞬間の前、木の枝をふと見つけた瞬間が純粹経験。

D グループ

文章をどう読むか。自分がやった経験と置き換えて読むしかない。レポートを通して読み方を教わった。ありがたかった。もっと落ち着いて西田文学を私たちも読みたい。純粹経験を理解しておくことが、フラットに理解できることに結び付くと感じた。

E グループ

純粹経験について出し合った。花育の授業でアリストロメリアを扱った時、花の入った箱を開けた瞬間生徒から「わーきれい。」という声が上がった。あれのことかなと。その気持ちを大事にしてねと助言があった。食べておいしい、あっちの店のあれやこれ、大人は経験を重ねたら、純粹経験はできないのかなと。思惟なのか意志なのか。「わーきれい」はどっちなのかなの問いで終わった。

F グループ

レポートの良さが話題になった。子どもの気持ちが伝わる。気持ちが分かる。分かろうとする私たちはそう思うこと自体が純粹じゃないんじゃないかなと。教師としてのエゴじゃないかなと。純粹に子どもを見るってどういうことかな。「子どもの小さな変化を見てそれを気づいて、自覚させてあげること」それが大事。わかろうとかじゃなくて。よく見て教えてあげることが教師として大事じゃないかな。

【唐澤正吉先生ご指導】

- ・レポートを読ませてもらって、「小さな変化を見逃さない。すごく良く見ている。見るっていうことが大事」ということを教えてもらった。
- ・ダンゴムシのお話は、主客未分に転じていく。知と愛につながる。知ると命を感じて、ダンゴムシになって行動をしている。主客が統一する。善の研究の善。本当にダンゴムシになって行動している。これを見ていける・見れるというのは純粹経験の理解につながる。自分の自己の理解セルフ。セルフの理解、齟齬を統一していく作業。
- ・「善」は、よく生きること。
- ・「純粹経験」は、スタートではあるがゴールでもある。程度の差がある。考えの元の仕組み。「純粹経験」は、私の経験でもない。この場。直感する他知りえない。意識的でない意識。どんどん動く。動的にある。一瞬たりとも、統一でない。時々刻々。人それぞれの体験で感じ方が違う時間の長短の感じの違いも、純粹経験に関係してくる。
- ・「純粹経験」から我々は離れられない。意識現象イコール純粹経験と思っていい。
- ・「西田哲学の特徴」は、主観でも客観でもない立場で考える。外から見たもの。中から見たもの。非言語的。情緒の心の奥底に伝わる何か。叙述言語の難解さ。見えてくるもの、心の中、内外も鏡のように見えてくる。この場、空間も意識現象。
- ・「経験」は、私、自己と思いがちだけれど違う。
- ・西田哲学に還元すると、人は様々な場所に触れ合う活動をしている。触れ合いの場、今ここにという現場、今ここに時空間、これ純粹経験と考えていい。イコール意志と呼んでいる。すべて純粹経験。逃げることはできない。P 86 ⑨の3行目、「立脚地～全てだけれど言葉にはできない。意識したらちがうものになる」モーツアルトとか華道の技術などを獲得した人はできる（逃げることができる）けれど、我々は、できない。今ここにという今の場を大切にしたい。事実その場そのままを大事にしたい。今が自分を作っている。
- ・「時間」イコール現在。而今（にこん）、有時（うじ）に生きる。他に時はない。今！
- ・教師の仕事はブラックと言われる。西田先生は、この問いかけに「知を愛すること」と説いている。